ニ番風呂

ダイチ

一番風呂は痛いので実は好きではないのです。

まだ湯けむりの充満し切らない白々しい浴室で、風呂は阿呆みたいにあんぐり口を開いてゐます。

その水面は、まるで個体であるかのやうに透明のコンクリートになってしまつて、秩序のごとく私の侵入を拒み、厳かに沈み込んでいます。

血の止まってしまった片足を息吐く口へと放り込みますと、いつでも想像を超えて、刺されたやうな、焼かれたやうな、疼くやうな痛みが駆け上がってくるのです。

皮膚の表面がはっきりとした境界線として意識されてきて、お湯たちはその無機質さを私の足先にも染み込ませやうとします。

「うっ」といふ呻きを、その後の一体感だけに頼りながらのみ込み、腰の下まで思ひきって浸けてしまふと、その時から、お湯たちは私の膨大な質量に観念し、その棘をしまい、その炎をなだめ、私の痛みへとお詫びを始めるのです。

私は親和性を帯びたお湯が好きです。

人間の油が溶け込んで、軟らかく伸びきった風呂は、もはや無機質さを失い、よほやく水面は、くつろいだ私の顔面を映し出すのです。

私は熟れた女の腕の中にいるやうな、果物の果肉を枕にしているやうな、生命の不思議な安心感を心のいたるところに生じ、無性に妻を欲するのでした。

夕餉の後、茶を入れる妻を横目にして私は意地悪そうに言ってやるのです。

「そんなことをしていないで、早く風呂へ入りなさい。冷めてしまうだらう」

私は一番風呂が好きではないのです。

私は妻が入った後の二番風呂が、この世で一等気持ち良いのを、信じて疑う余地を持ちません。

それは、妻の匂いに満たされて、彼女からこぼれおちた全てを漂わせるのです。

髪の毛に、皮膚に、垢にでさえ、私は優しさとかわいらしさを見出して、また、二人が入った後に残された揺らぐ湯を見ながら、愛だ、愛だ、とさわいでみるのです。

さぁ、今日もお風呂へお入りなさい。私より先にお入りなさい。

私はあなたの後の二番風呂にこそ一日の祝福を感じるのですから。